

世界農業遺産国際スタディ・プログラム 研修レポート

総論

1. 研修前に抱いていた考えとその変化

私は輪島市出身で、震災を経験したことをきっかけに地元である能登のために何か貢献したいという気持ちを抱くようになりました。このプログラムの募集を見たとき、「創造的復興」という言葉を掲げているのを見て、ただ単に震災前の元の姿に戻すのではなく、地域の魅力を再発見して新たな形で発展させていくという新しい復興の形を知り、私自身も能登の魅力や伝統文化を次の世代につなぐような活動をしたいと思い参加を決めました。また、イタリアの国連機関本部を訪問できることも参加の決め手の一つでした。もともと国際問題について関心があったので実際に現地で働く方々の生の声を聞くことができるということはとても魅力的に感じました。

研修に参加する前、伝統的な文化はできるだけ昔の形を変えないようそのまま傳承することがもっとも大切なことだと思い込んでいました。能登にはキリコ祭りなどの祭礼行事、白米千枚田の伝統的な農法、揚げ浜式塩田など、地域の人々の暮らしと密接に結びついた多くの伝統文化があります。これらは昔ながらの姿をできるだけ変えずに守り続けることが最も重要だと思っていましたが、研修を通してその考えが少し変わりました。現地で活動する方々の話を聞いて、伝統をただ守るだけでなく今の時代に合った形で活かすことの大切さを学びました。たとえば、向田の火祭りの観光客や若者を呼び込むことで地域の活性化につなげている取り組みや、谷川醸造さんの昔ながらの製品を守りつつも新しい商品開発や外に向けた販売を行っている姿を見て、伝統文化は変わらずに続いていくものではなく人々の工夫や挑戦によって時代に合わせて形を変えながら受け継がれていくものだと感じました。

2. 研修で得たこと

私がこの研修で得た最大の収穫は研修で交流した様々な人が皆自分の軸を持って生きているということに気づいたことです。能登で活動する方々や国連職員の方々の多くが自分の信念や目標を明確に持ち、それぞれの立場から地域や社会に貢献しようとしている姿に強く心を動かされました。これまで私は明確な将来像を持っておらず、将来に対して漠然とした不安を抱いていました。しかし、研修を通して出会った方々がそれぞれの分野で信念をもって行動に移している姿を見て、自分ももっと主体的に動いていきたいと感じました。この研修を通して、自分も将来は地域や社会の課題に対して自分なりの視点から貢献できるような人になりたいと強く思うようになりました。

3. 次期参加学生へのメッセージ

この研修で出身や年齢、専攻の異なる他の参加学生と交流し、一丸となって様々な視点から能登の活性化について考えることができたことは自分の視野を広げる大きなきっかけとなりました。またイタリア研修では国際機関の訪問やファームステイ体験といった普段の観光ではなかなか体験することのできない貴重な経験を得ることができました。

私は海外経験がなく、新しい挑戦をすることに関して不安を抱いていたこともあり、この研修に参加するかどうかもとても悩みましたが、思い切って挑戦してみたことでたくさんの学びを得ることができ、この経験が自分の将来を考える上で大きな糧となったと感じています。もし少しでもこの研修に興味を持ち、参加を迷っている人がいるなら、ぜひ参加することをお勧めします。